

低位生産地における

酪農経営五カ年の実績

北海道天塩町幌延地方酪青連盟

中島孝

北海道の最北端天塩の地で、しかも土質に恵まれない私は、従来のわが家の農業経営を省み、昭和二十五年酪農経営五カ年計画を樹立してその実施に入つて以来昭和二十九年を以つて、一応その実施が終了いたしましたので、当初私が計画した経営改善事項の概要とその実績について述べてみたいと思ひます。

最初に私の経営の概況を紹介いたしますと、第一表のようになつております。

第一表 経営概況

地	耕地		畜	家	
	野草地	放牧地その他	搾乳牛	三頭	三頭
土	三〇〇反	三〇〇反	一八カ月以上	一頭	二頭・五頭
計	三〇〇反	三〇〇反	一八カ月以上	一頭	二頭・五頭

家族人員 七人 稼働人員 四人
成人労働換算 三・二人

土地の条件は所有面積の三分の一、約六町歩は高位泥炭地で、その他は重粘地となつております。しかるに計画を樹てた五年前、当時重粘地の状態は極めて有機質に乏しく、なおかつ地力は全く衰へ、さらに全耕地のP・Hは四・五・五・〇という強酸性を呈し、ためにクロバーの生育可能な所はほとんどないといつた状態で、僅かの乳牛も冬季間はほとんど搾乳をせず、私は秋の農作業の終了するのを待つて冬山に働き、その間乳牛の栄養状態は申すまでもなく非常に悪く、私が冬山より帰つて来る頃は全

く骨と皮で辛うじて命つなぎをしてゐる程度、極めて非科学的な方法で万事経営が行われていたのであります。昭和二十四年度の主要農作物の生産量並びに生産乳量は第二表の通りであります。第二表 昭和二十四年度農業生産量

作物名(乳量)	反当収量
馬鈴薯	三俵
燕麥	四俵
裸麥	一五俵
豆類	三五俵
デントコーン	六〇貫
搾乳牛一頭平均	一八西石

このような経営を行つてゐたものでは何時になつても生活の向上はなく、豊かな酪農経営の実現をみることは望めないと考え、私と同じような実情にある地区の同志とともに種々協議を行い、経営振興のため酪農経営五カ年計画を樹立したのであります。私はまず両親の経営に対する長い歴史的な古い考え方に對し精神的な反省と理解を求め、強ちにその計画を推進したのであります。その計画は次のようなものであります。

酪農経営五カ年計画実施項目

一 低位生産地を高度化するために低湿地には明渠排水を掘り、各圃場には暗渠排水を付けるようにして、酪農青年研究連盟会員及び部落代表者と協議し、土地改良後の基本作物としては甜菜を取り入れることを目標とした。

二 酸土矯正のため、毎年各自が炭酸石灰及びライムケキを購入し矯正を行う。

三 泥炭地には反当三〇台以上の客土を行う。

四 堆厩肥の生産目標を私は二五、〇〇〇貫として毎年確保した。

五 圃場には牧草を取り入れた六年輪作として地力の増進を考慮し実施するよう基礎を作つた。

第三表 圃場の輪作形式

一年目	燕麥(チモシー混)
二年目	赤クロバー、チモシー
三年目	チモシー
四年目	デントコーン、フリントコーン
五年目	甜菜、馬鈴薯
六年目	豆類、その他

第四表 年次別主要作物の反当生産収量と一乳期の生産乳量

年次	作物	反当	一乳期平均乳量
二十五年	甜菜	一四〇〇斤	三・七
二十六年	馬鈴薯	二七〇	三・七
二十七年	燕麥	三三〇	三・七
二十八年	裸麥	四七五	三・七
二十九年	豆類	五二〇	三・七
部落平均	デントコーン	三六〇	三・七

第五表 年次別肥料の購入量の推移

年次別	窒素	磷酸	加里	摘要
二十五年	一八俵	二六俵	五俵	このように購入肥料の漸減して来た
二十六年	二五俵	三六俵	五俵	理由は、牧草類を五加味した輪作の実
二十七年	三三俵	四六俵	五俵	進め、堆肥の増産
二十八年	四三俵	五五俵	五俵	による堆肥の増産
二十九年	五三俵	六五俵	五俵	による堆肥の増産

第六表 主要作物の反当所要労働時間 (成人換算)

作物名	反当所要労働時間
甜菜	六三・五〇
馬鈴薯	五九・〇〇
燕麥	三五・二五
裸麥	四一・〇〇
玉蜀黍	四一・二五
豆類	四八・七五
デントコーン	三四・〇〇
家畜ビート	五三・〇〇

ための自給飼料の増産と確保に努めるとともに、さらに機械化等により生じた労働力を以つて乳牛の飼養管理にあたつたのであります。次に参考までに私の経営における昭和二十九年の冬季間の飼料給与計画を示すと第